

ゆきのん物語

# 紅色の花びら

文・絵 うなむ

こんにちは、わたし、**ゆきのん**  
四つ葉のクローバーの妖精だよ

このクローバーを風に乗せて  
世界中を飛んでいるの



今日は、わたしが春の季節に  
出会った女の子のお話をするね

ゆきのん物語

# 紅色の花びら

文・絵 うなむ

その日、ゆきのんは、

あたたかい春の風に乗って、

クローバーで空を飛んでいました。

すると、どっぴからか声がします。

「えーん、えーん。」

誰かが泣いているようです。

「あ、あの上から声がするわ。」

ゆきのんは、声のする方に

行ってみるとどっぴでした。



「桜の花？」

ゆきのんは見上げて、

その木が桜の木ださういふこと

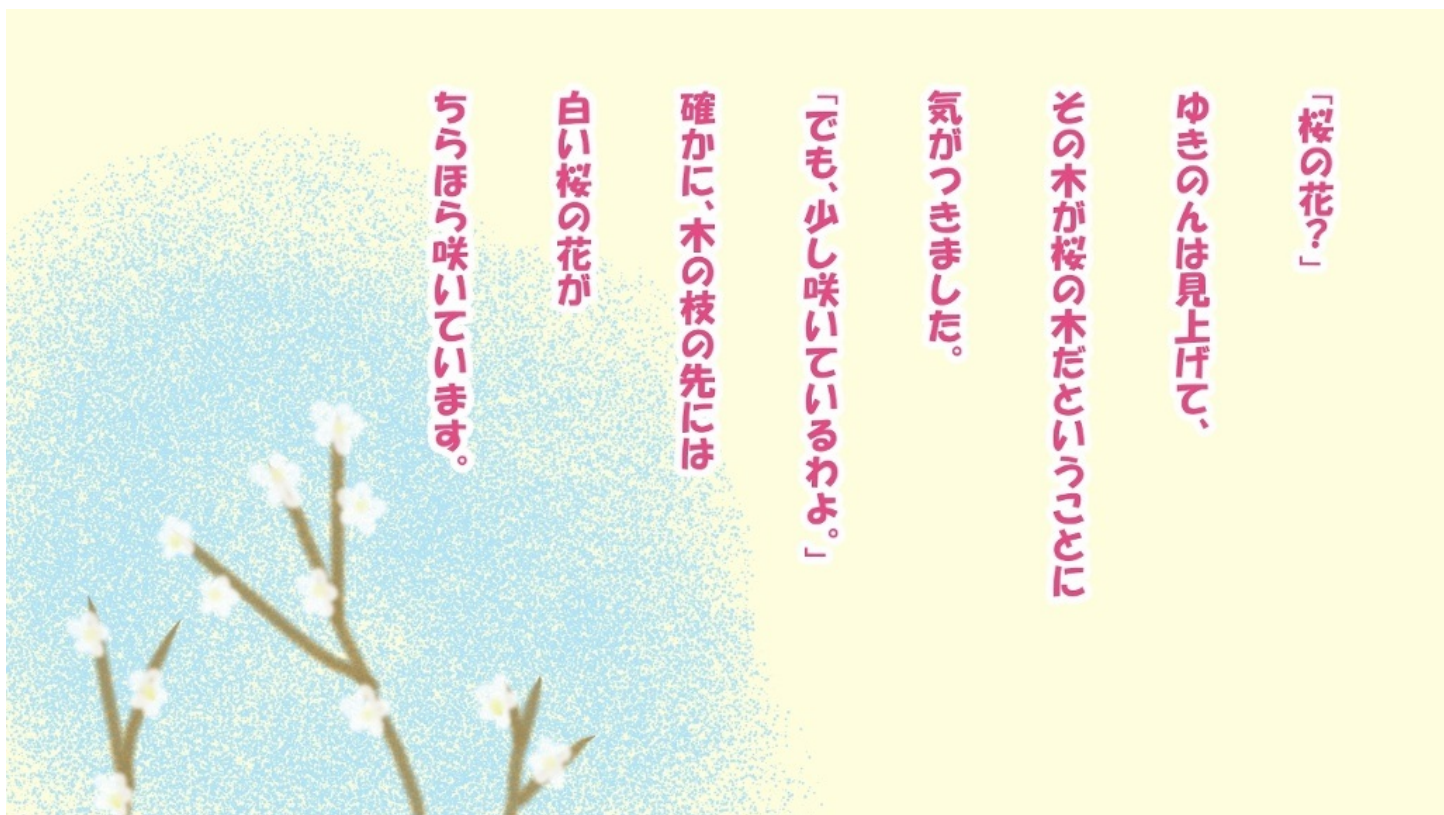
気がつきました。

「でも、少し味いているわよ。」

確かに、木の枝の先には

白い桜の花が

ちらほら味いています。



「違うわ、そんな色じゃないの。」

それに、いつもはもっと

たくさん味かせられるのよ。」

「あなた、この桜の木の妖精なのね？」

「ええ、そうよ。」

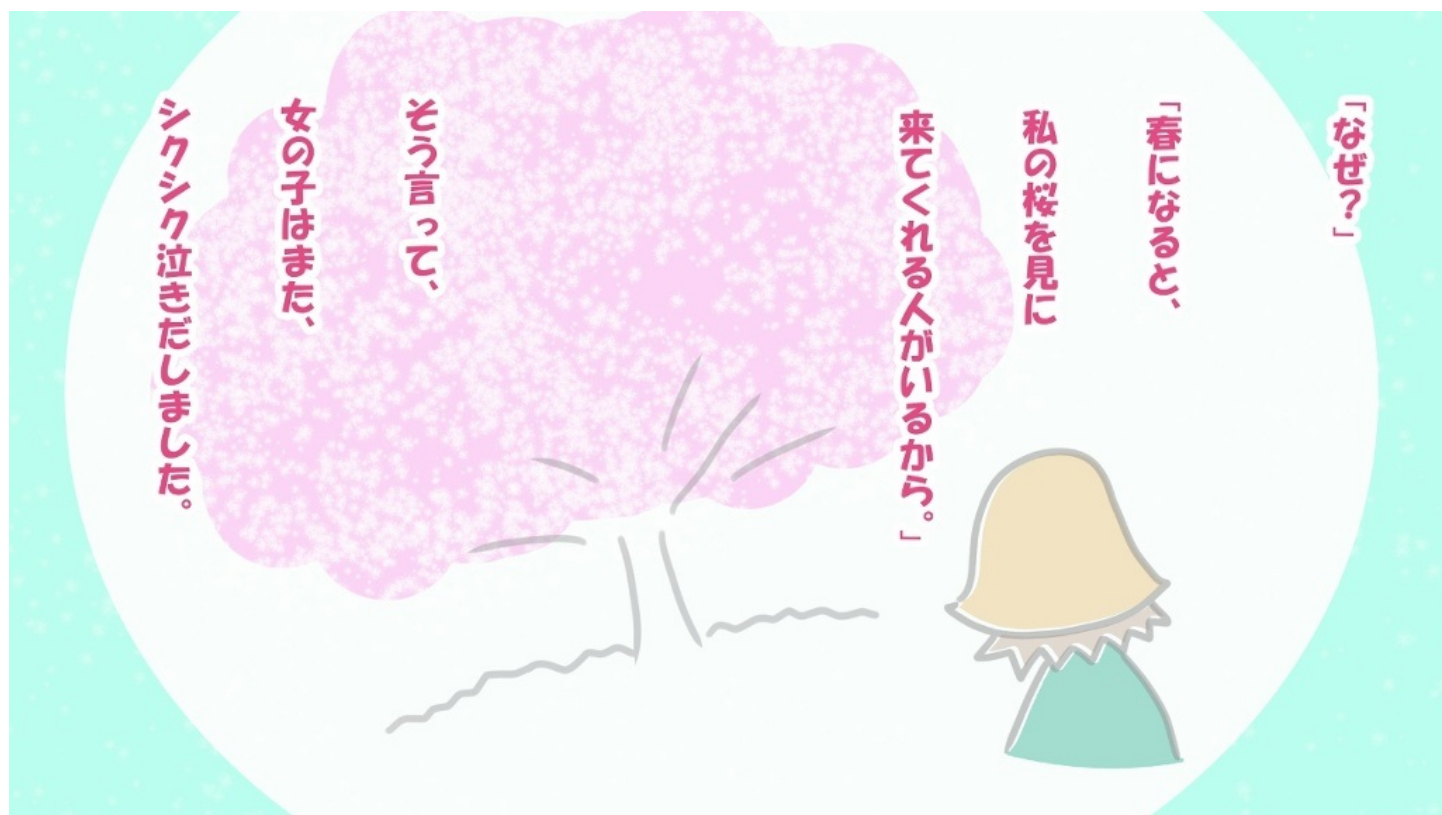
でも、今年は上手くいかなくて……」

「それで、大声で泣いていたの？」



「だって、

どうしても味かせたいんだもの。」





ゆきのんは、

その子の肩に

ポンと手をのせて言いました。



「ねえ、私はゆきのん。



私もクローバーの妖精なの。

あなたの名前は？」

「あなたも妖精なの？」

私の名前は、ベニカよ。」

「ベニカ、その話、

もう少し詳しく聞かせてくれる？」

「うん、わかったわ。」

ベニカは涙をぬぐって

話し始めました。





十年前に、

ある人が気球に乗って

ここに来て、

この桜の苗を植えたの。

その人は、世界中に

桜の木を広める活動を

しているいわ。

彼は、すぐく桜を愛してらして、

苗だった私にも、

たくさん話しかけてくれたの。

私は、

それがとても嬉しくて

年に一度だけ

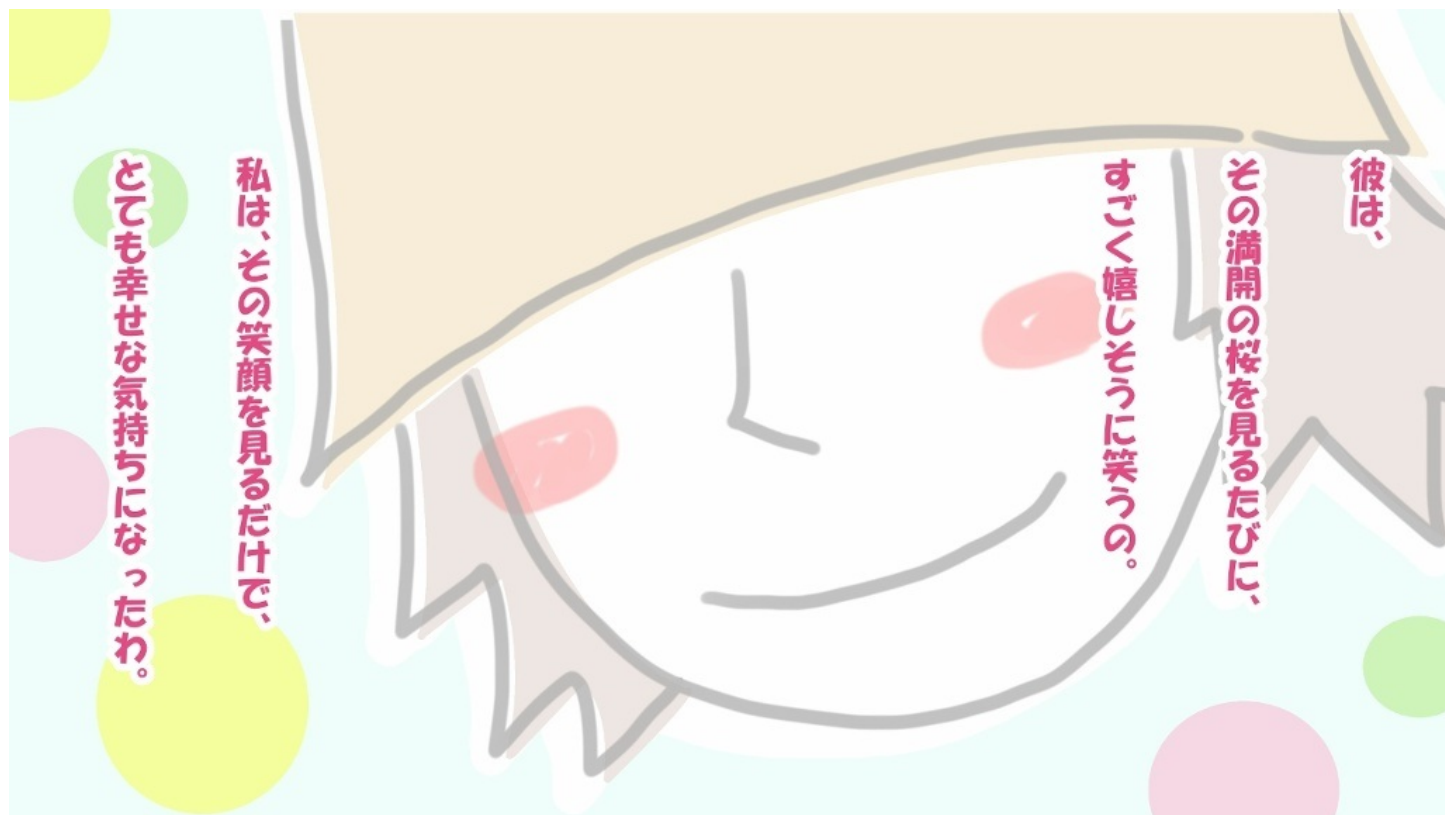
この季節にやってくる彼を

喜ばせたくて、

毎年、毎年、必ず、

うす紅色の桜を、満開に咲かせたわ。







私を妖精にしてくれたのよ。

山の神さまが力を貸してくれたって、

そうしたら、去年、

さ思うようになったの。

「私は彼と話してみたい」

そんなことが数年ほど続いて、





でも、なぜだか

私は、

彼に話しかけることを

急にためらってしまって、

結局、木に隠れて

そっと彼を見ることしか

出来なかった。







「だからね、

《今年こそは彼に話しかけよう》

と決めたのに、上手く味かないのよ。

今までどうやって

桜を味かせていたのか、

まったく、

分からなくなってしまった。」

「それは困ったわね。」

「どうなのよ、

早くしないと彼が来ちゃうわ。」





「うふふ。」

「ゆきのん、やうじい様なの〜」

「ベニカは彼に恋しているのね。」

「じい〜」

「彼のこと大好きってことよ。」

「そのゆきのんの言葉に、」

「ベニカは胸のあたりが」

「熱くなるのを感じました。」







ベニカがそう言うと、

突然、大きな風が吹き、

桜の花が次々と咲き始め、

数分と立たないうちに

ベニカの桜の木は

満開になりました。



「そういえば、

前に彼が言っていたの。

ここに植えた桜だけ、

いつも紅色だって。

他の桜は白いのに、

不思議だって。」

「ベニカの想いが、

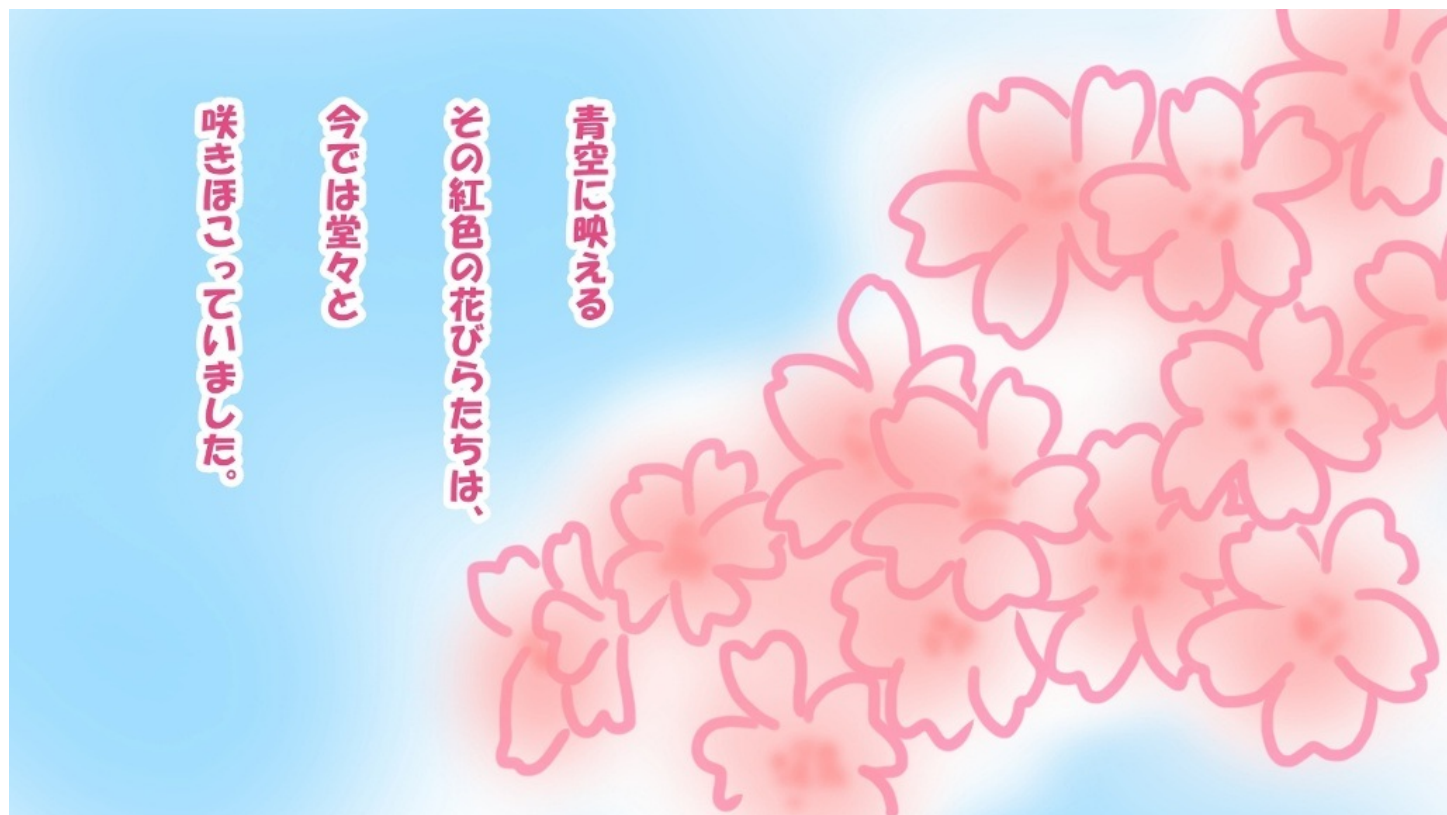
花びらを紅色に染めたんだわ。

誰かを好きという気持ちって

本当に素晴らしいわね。」







青空に映える

その紅色の花びらたちは、

今では堂々と

咲きほこっていました。

「ゆきのん、ありがとう。」

これで彼を喜ばすことが出来るわ。」

そう言ったベニカの瞳が、

キラキラと輝いています。

「ベニカ、

今とってもワクワクしてるわね。」

「うん、実は、勇気を出して

彼に話しかけてみようと思ってるの。」

私の想いを伝えるわ。」



「素敵だわ。」

それ、私にお手伝いさせてくれるっ？」

「いいけど、どうするのっ？」

ゆきのんは、

ベニカの心に宿った、

ワクワクの種に、

たっぷりとお水をあげました。

すると、

すぐにクローバーの芽が出て、

ベニカの心は、

ワクワクで満たされました。



「ゆきのん、本当にありがとう。」

私、もうちょっとも怖くないわ。」

ふたりは、手を取り合いました。

「ベニカ、じゅじゅじゅじゅ。」

素晴らしい桜を見せてくれて、

ありがとう。

あなた今、

とっても美しくてキレイよ。

彼もきっと、

あなたの気持ちに伝えてくれるわ。」



